中野重治全集

第二十四巻

中野重治全集

第二十四巻

筑摩書房

中野重治全集第二十四巻
一九七七年九月三十日初版第一刷発行

著者　中野重治
発行者　井上達三
発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号　一〇一－九一一
電話　〇三(291)七六五一(代表)
振替　東京　六－四一二三
印刷　株式会社精興社
製本　株式会社鈴木製本所
装釘　栃折久美子

© 1977 Shigeharu Nakano　Printed in Japan
0393-73324-4604

第二十四巻　目次

四方の眺め　一
春夏秋冬　一六一
小品十三件　三三一
緊急順不同　四七三

後記
著者うしろ書　楽しみと苦しみ、遊びと勉強　六五三
解題　六六一

四方の眺め

まえがき　三
年頭歳末　五
ひとめぐりか、ふためぐりか　一五
文意明瞭のこと　二七
外国と外国人　四〇
吉田松陰と福沢諭吉　五〇
無知と軽はずみ　六三
花束と国宝　七六
プライヴァシーと「せいのび」　八七
フィクションと真実　一〇四
実物、実名の場合　一二四
ばたばたとした日暮し　一三〇
阿波丸　国会　日本人　一四二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

春夏秋冬

前書き　一六三
著作権、編集権など　一六六
ハバナとサイゴン　一七三
鷗外「中略」のイデオロギー　一七八
なまりの氏素性　一八五
日比谷松本楼　一九一
通りすがり　一九七
受取状一枚　二〇四
五月二十八日の記　二一〇
ある戸惑い　二一七
「三〇年代」の文学　二二三
碌山館と開智学校　二三〇
富本一枝さんの死　二三六
原鼎あて河上肇書簡　二四三

佐野碩の死　二五〇
スペヤの説　二五七
裁判官国民審査のこと　二六三
靴下と女　二七〇
数学コンクールの話　二七七
うつとうしい断片　二八七
国会デモと日共四十五周年　二九三
私にも連帯責任があるのか　三〇〇
町会長三代　三〇九
北朝鮮と西ドイツ　三一五
西ドイツの場合　三二二

小品十三件

前書き　三三三
和文和訳の件　三三六
徳永直選集の件　三四五

詩集『おかしな娘』の件　三五九
柳瀬正夢伝のひとコマの件　三七四
原色版ならびに印刷紙の件　三八四
漁民、漁船、漁業の件　三九二
文壇、勲章、宮内庁などの件　四〇三
憲法第十章「最高法規」の件　四一二
このごろ理念ばやりの件　四二二
土面積、水面積、空面積の件　四三三
日本語アクセントの件　四四二
「異民族」という言葉の件　四五一
「本土の沖縄化」という言い方の件　四六一

緊急順不同

著者まえがき　四七五
この標題の意味　四七七
小林の仕事の研究など　四八五

「樹海同志」は実在するか　四九五
柳田泉の「天地生民の心」　五〇三
一九六〇年の一枚の絵ビラ　五〇八
安保と柳瀬、ベン・シャーン　五一五
『赤旗』の批評と記事訂正　五二四
考えられぬ写真のまちがえ　五三〇
二つの世代をつなぐ環の欠如　五三七
在日朝鮮人の問題にふれて　五四三
三畳以下に住む二千八百世帯　五四九
日韓議定書以来　五五五
無条件降伏のとき　五六一
同時代の一人として　五六七
朝鮮人学生めがけての暴行　五七一
三・一運動と柳宗悦　五七七
「朝鮮解放問題」アンケート　五八三
民族問題軽視の傾き　五九〇

民族を階級運動にどう生かすか　五九六
逆関係の「雲泥の差」　六〇一
徳永直全集、選集、また著作集を急ぐこと　六〇七
花田清輝のこと　六一三
中村智子の「評論」について　六一九
空想する自由と根拠　六二五
ラヴォアジェと宮本百合子論　六三一
もう一度天皇制その銭金の面　六三七
事実しらべの必要のこと　六四〇

四方の眺め

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

まえがき

ここに集めたものの大部分を私は一九六一年に書いた。最後の一篇だけが一九七〇年のものである。ただし、最初の一篇は六一年二月号の雑誌に印刷されたから、手で書いたのは六〇年末だつたろうと思う。しらべてわかることでもあり、しかし何にしても大部分ざつと十年まえのものである。

これらを私は雑誌『新潮』に書いた。つまりこれらは『新潮』に連載された。この連載ということは、日本の、私自身の知る実情に即していえば厄介なものである。同時に便利なものでもある。毎月書かねばならぬということから無理にも書くことになり、そこに、特に私の場合いいかげんにでも書いてしまうということが生じる。そこにまちがい、誤りが生じる。しかしまた誤りその他を割りに早く訂正することもできる。私は実際いろいろの誤りを書いた。その訂正のことも書いている。そうして、十年たつてみるとおもしろくないこともない。私はよたよたとして書いているが、十年たつてみるとそのよたよたに意義が見出せるようでもある。

これらを私は無理にもいいかげんにも書いた。最初からそれは意識にあつたから、私は、自分は問題を終極まで追つて考えてその挙句に書きしるすのだという態度をとらなかつた。雑誌に書いたとき「途中の問題」という題をつけていたのもそれによる。最後の決着の姿ではない。途中の考えだということを告白していたものでもある。そこに売文業者の姿の一面があり、尊敬する学者たちの姿とはちがつたものがある。しかし学者たちではあつても、長い物差で計れば途中の問題ということがあるものなのかも知れない。そこはわからぬ境地ではあるが、自分のよたよたを私は必ずしも恥じてばかりはいない。自慢にも何にもなつたものでないことはわかつているが、

これだけのものとして提供しても悪くはないと思つている。

私は、「中華民国」のことについて早とちりの勘ちがいをやり、諸方に迷惑をもかけた。しかしそこで、十年たつてみて、こんにちただ今の日華会議といつたものの動きに照らして、日本人谷、日本人岸などの姿が思い出されてくるというようなこともないとはいえぬ気がする。まずまず私は目をつぶることができる。特に私は、阿波丸のことなどではあらためて訴えたい気持ちを持つている。なお、すぐにも一冊の形にするようなことを言つていて、べんべんとして十年も待たせてしまつた新潮社出版関係の人たちに感謝する。本の題は、できれば「しほうのながめ」と読んでもらいたいと思つている。

一九七〇年夏

年頭歳末

中途半端がいいか中途半端でないほうがいいかとなれば、中途半端でないほうがいいに決まつている。いつか平野謙がおれは中途半端が好きだという意味のことを書いて、すると小田切秀雄がおれは中途半端がきらいだという意味のことを書いた。ただそもそもの話、中途半端が好きだといつたことを書いたにはしろ、平野は、中途半端こそが最上だと言つたわけではなかつたろう。中途半端という言葉そのもの、この観念そのものが、中途半端でないものをこそ前提として予定していた。そうでなければ、中途半端そのものが出てきようがない。平野、小田切の名は、彼らの言葉を正確に引用できぬ今ここで削つておいていい。つまり私は、彼らの名にひつかけないで書く必要がある。ところで、その私が、私一個として、自分が中途半端なところにいるのを感じて我ながらいやになることがある。しかもそのことを書いて発表することに、すでに中途半端な疑問が出てきてしまう。何かそんなことについて、自分の文学的な意見、政治的な意見を書いて発表することにすでに疑問が出てきてしまう。ところで、書くことは本来の私の職業なのだから、これは職業にたいする疑問ということにもなるが、人は、わが文学的同僚たちは、そのへんをどう割りきつてやつているのだろうか。

といつたところで、この中途半端な心持ちそのものを完全に追究することが自分にできないのだから、人はそこをどう処理しているのかと問う資格が完全には私にないことにもなる。問う資格のないのに人に問いをかけるのは、ことがらによつては卑怯ということにもなりかねない。人はどうやつているのだろうかと問いたい気持ちは私にあり、この際それが卑怯になるとも私は思わぬけれども、こう問いかけることもここで私はやめておこう。

いくらか便宜主義的にそれはやめる。

中途半端な気持ちは自分の本職としての文学について第一にある。前に一度、私はそういう自分の正体が暴露されて内心恥じたことがあつた。そのとき私はそのことを書きかけてもみた。そうしてうまく書けなかつた。そうして、うまく書けないそのことが、さらにもう一つ私の正体暴露になつていることはわかるもののそこがなかなか直らない。私は文学を本職としている。これは自分でえらんだもので他から強制されたものではない。自分でえらんだその本職をば、どこまで私がほんとに尊重しているか。一方では、おれは文学を大事にしているぞという気持ちが私にある。それほど大事にしていないある文学者たちに比べれば、たしかに私のほうがそれを大事にしていると思う。しかし他との比較ということをはなれて、ことに大事にしていないほうの人びととの比較をはなれて、全く大事にしている人びとに比べてはどうなるか。またそもそも他との比較ということから離れて、世界と文学と作者とという関係のなかでそれはどうなつているか。これではならぬと思いながら、何やかやで——何やかやでといつた言い方にすでに問題があるが——ずるずると、文学を尊重しない方へ引きずられている傾きが自分にある。

一昨年（一九五九年）の春の終り、ソ連作家大会のあとで私はグルジヤへ行つた。インド・ケララの作家ピライといつしよだつたが、ある日私たちは、山あるきの途中で年八十五になる一人の栽培家を訪ねて行つた。栽培家というのかどうかよくは知つていない。園藝家といつてはちがつてくるようにも思うが本筋には関係ない。とにかく、いつたいにあのへんはあつたかくて、ロシヤとちがつて草木の類が日本のに似ている。松、杉、檜、伊吹、樫、泰山木、あざみ、棕櫚、柏、菩提樹、楓、ユーカリ、椿、柳、すずかけ、赤花アカシヤ、つつじ、くさつげ、睡蓮、ひつじぐさ、くすのき、青木、桐、あじさい、ばら、南天、ひいらぎ南天、まさき、てつせん、いちじく、桑、からたち、えにしだ、胡桃、葡萄から擬宝珠などいう種属までびつしり繁つていて、たぶんそのた

めにも私は油断の気持ちになつていたろうと思う。日本風でない樹木もむろんいつぱいにあつた。

私たちが手を出すと老人は手を握りこぶしにしたままで出した。老人は仕事していたところだつたから、手のひらを泥だらけにしていたための握りこぶしということがこちらにわかり、そんなことさえ私の油断の気持ちを助けていたろうと思う。シャボテンの温室を見たり、自慢の「日本の楓(かえで)」を見たりした挙句、ついつい私がこんな意味のことを老人に言つてしまつたのだつた。

「私も、文学なんぞやるより栽培のことをやればよかつたにと思いますよ。」

言葉はやはり正確には覚えない。意味はたしかにそんなことを言つた。

「ふうん……」

老人はそんなことを言つたが、それきりこのことには触れなかつた。そして私はどつと後悔した。

通訳してくれたイリーナ・リヴォーワとは大分親しくなつていて、彼女のほうから私にいろいろ意見を聞かせてくれるようにもなつていたが、彼女もこのことにはついぞ触れなかつた。ピライも、もともと話は老人と私とのあいだで、リヴォーワを介してロシャ語と日本語とだけでかわされたのだつたから何もいわなかつた。無論こんなことで格別考えぶかそうにする必要はない。ただの挨拶、いくらかの冗談としてその場はそれなりにすんだのだつたろう。問題は私本人にあつた。ピライは――インドないしケララには日本のような文壇はなかつたから――牛などを使つて百姓しながら文学の仕事をしていた。その彼の横手で私の口からそんな言葉が出たのだつたから、才能が大か小かということではない。大小ということはもとよりあるが、小才能ならば小才能なだけ、私は文学においていつそう本気であるべきだつたということだけが残るだろう。

「そんなちつぽけな才能で、文学などいうものをおまえはやろうというのかね……」

そうきかれたとして、私には答えが一つだけあるはずだつた。

「さよでございます。それだけに、私としては一心になつてやつているのでございます。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com